



Title	「群像」が消失したアクションリサーチ：宮前良平 『復興のための記憶論—野田村被災写真返却お茶会の エスノグラフィ』を考える
Author(s)	高森, 順子
Citation	共生学ジャーナル. 2022, 6, p. 240-253
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86434
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研究ノート

「群像」が消失したアクションリサーチ
一宮前良平『復興のための記憶論—野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィ』を考える—

高森 順子*

Action Research where the Collective Disappeared
On Memory for Disaster Recovery: Ethnographic research of Noda Picturesque by Ryohei Miyamae

TAKAMORI Junko

論文要旨

宮前良平著『復興のための記憶論—野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィ』は、著者が約6年に亘り現場に介入し、現場がより良くなることを目指したアクションリサーチの労作である。ただし同書は、著者と当事者の一対一の関係が分厚く記述される代わりに、現場の群像がほとんど記述されておらず、事実と異なると判断される記述も確認される。本稿では、その記述内容を具体的に分析し、そのような記述に至った背景は、著者が「研究の導入」と「現場の変革」の因果関係の証明を過度に前景化した結果であり、著者は現場の動態を「一人の研究者兼実践者」と「一人の当事者」という、一対一の因果論的、的論的關係の形式に落とし込むことに囚われていたのではないかと推察した。そして、現場の縮減ともいうべきそうした変換の繰り返しのなかで、現場の展開動因としての著者自身の存在と実践を際立たせようとするあまり、事実と異なる記述さえ生じるに至ったのではないかと結論づけた。その上で、エスノグラフィの記述の方法論と、アカデミアの構造的問題について、広く議論する必要があると論じた。

キーワード 現場研究、アクションリサーチ、群像

* 愛知淑徳大学助教；junko.takamori@gmail.com

1. はじめに

2020年12月に大阪大学出版会より出版された宮前良平著『復興のための記憶論—野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィ』は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の津波被災地各所で見られた、津波に流された写真を元の持ち主に返す活動のうち、岩手県九戸郡野田村において行われてきた「写真返却お茶会」を考察するものである。同書では、研究者が現場で当事者とともに協働的実践を行うアクションリサーチの研究スタンスに則り、その展開がエスノグラフィとして記述されている。また、同書はエスノグラフィの記述を通して、当事者の「想起」や「記憶」をめぐる問題を析出しつつ、そこから震災復興のあり方を問い直すことを企図している。

人類学者の木村周平は同書のエスノグラフィについて「人々のふるまいや言葉を丁寧に拾い上げ、生者と死者、かつてとこれから、その時そこにいた人たちとなくなった人たちを見据つつ、議論」（木村 2021）していると評している。

著者である宮前は、2014年2月に初めて野田村を訪れ、同年6月29日にはじめて「写真返却お茶会」にボランティアとして参加している。著者は野田村で活動するボランティア同士をつなげるネットワーク「チーム北リアス」傘下の「写真班」という集団のメンバーとして、以後、現在まで26回に亘り「写真返却お茶会」でのボランティアを継続している。また、「写真返却お茶会」が行われない日にも野田村を定期的に訪れており、「写真返却お茶会」では出会えない人々とも交流を重ねている。その意味において同書は、野田村という被災地のありようの変遷を、約6年に及ぶ実践と研究の往還を通して考察した労作である。また、同書が取り扱う協働的実践の大半が著者本人が大学院生の立場において行っていたものであることを踏まえれば、この6年という時間は、実践と研究の往還をとおして「研究」とはいかなる行為であり、「研究者」とはいかなる立ち位置であるかを学び取っていく過程であると考えられ、初学者ゆえの「応答」（西村 2007）が得られた研究であるとも捉えられる。さらに、同書では現場に潜在していた知を他の現場へと援用する可能性や、同研究が目指していた「災害復興」や「記憶」といった概念をアップデートする可能性が示唆されており、きわめて野心的

な研究でもある。

しかし、残念ながらそうした可能性が十分に検討され、新しい知見が提出されるに至っているとは言えない。それどころか、そうした考察を支えるはずのエスノグラフィには、現場の当事者間の集合的なやりとりがほとんど見られない。また、明らかに事実と異なる記述もみられる。本論では、同書のエスノグラフィの描かれ方を検討し、著者の現場への認識のあり方が、アクションリサーチの展開に重大な支障をもたらしていたと推論する。

2. 「写真返却お茶会」の記述における「群像」の消失

本書において、「写真返却お茶会」のエスノグラフィは11のブロックに分かれている⁽¹⁾。そのなかには、「写真返却お茶会」に来ない人に著者が話しかける場面や、著者も含む写真班メンバーで他の写真返却活動を見に行った場面が記述されているもの、つまりは「写真返却お茶会」そのものに関する記述ではないものも含まれている。ここからは、それらもすべて「写真返却お茶会」に関するエスノグラフィとして取り扱い、それらに一貫した問題として、何が記述されていないのかを具体的に見ていく。

まず気にかかるのは、11のエスノグラフィにおいて、「写真班」や「野田村民」の参加人数といったような、「写真返却お茶会」という実践の規模を示す基本的かつ具体的な数字はほとんど示されていないということである。例えば、最初のエスノグラフィにおいては「この日は、結局、誰も写真返却お茶会に来なかった」(同書:9)という記述から、参加者がゼロであったことは示される。しかし、「写真返却お茶会」を開くにあたって参加者を待っていたはずの写真班メンバーが何人いたかは示されない。11のエスノグラフィのうち、唯一、写真班の人数が示されるのは、「写真返却お茶会」においてではなく、陸前高田市で写真返却会を行う団体へ写真班メンバーとともに著者が出向いた場面を扱うものである。そこには「私と野田村チーム北リアス写真班から3名の計4名」(同書:255)が訪問したと記述されているが、それは「写真返却お茶会」そのものの規模を推し量る補助線にしかない。

次に、著者とともにアクションリサーチをしているはずの写真班メンバーの具体的なふるまいが記述されているのは、11のうち2つのエスノグラ

フィ（「母親の遺影の夢」、「最後の一枚まで」）に留まっており、その他9つにおいては記述が全くない。

その一方で、著者が分厚く記述するのは、著者と参加者との一対一のやりとりである。ここでは、それら一対一のやりとりの内容には深く立ち入らないが、そのやりとりの記述において、そばにいたであろう写真班メンバーの姿はエスノグラフィの文中では完全に消えている。一対一のやりとりにおいて、著者が「少々面食らって、正直にいうとかなり面食らって」（同書:231）いたり、「お茶も飲まずにその写真を一緒に見続けていた」（同書:232）りしていても、写真班メンバーが姿を現すことはない。また、そのような戸惑いを著者自身がその後、写真班で共有したかどうかとも示されない。

では、写真班メンバーの具体的なふるまいが記述されている2つのエスノグラフィはどのようなものか。

エスノグラフィ「母親の遺影の夢」では、母親の遺影を探しにきたというCさんに対して、著者も含む写真班メンバーが対応する様子が記述されている。

私たちチーム北リアス写真班は、ただならぬものを感じ、夢にでてきたCさんのお母さんの遺影を全員で探し始めた。Cさんのお母さんは、白黒の写真しかなかった時代に亡くなってしまっているの、みんなで白黒の写真を洗いざらい探す（同書:150）。

ここでは、著者と写真班メンバーである「私たち」が「ただならぬものを感じ」たこと、および「探す」という行動をしたことが示されており、「写真班」メンバーと著者が感情と行動を一致させていたことが記述されている。ゆえに、写真班メンバーの個々の行動の差異や発言は窺い知れない。

一方、エスノグラフィ「最後の一枚まで」では唯一、写真班メンバーの具体的な言動と、それに対する著者の態度が示される。

ボランティアのなかには、参加人数が少ないことを不満に思っ、呼び込みに行こうと提案する人もいた。しかし、ここに来ていた被災者の方々は、笑っていて満足そうにしていた。そのとき、あるボランティアが言った。「わたしたちは、最後の一枚までも続けていかなきゃね」。ただ単に写真をたくさん返すというよりも、思い出話を共有できる場をつくっていくことの重要性に、私がふ

と気づいた瞬間だった(同書:259)。

このエスノグラフィにおいて、著者が表そうとしたのは何か。「参加人数が少ないことを不満に思い、呼び込みに行こうと提案する人」と、「わたしたちは、最後の一枚までも続けていかなきゃね」と声をかけた人を、著者は対立する関係として捉えていたのではないか。つまり、著者は、「呼び込み」という実践の提案に対して、「ただ単に写真をたくさん返す」という仮定の実践イメージを重ね、「呼び込み」は写真班の活動スタンスとはそぐわないものであると捉えている。一方、「最後の一枚までも続けていく」という実践の提案については、「思い出話を共有できる場をつくっていく」と言い換え、それは写真班の活動スタンスが反映されたものであると捉えている。しかし、この解釈は妥当だろうか。「呼び込み」は、著者が仮定した「思い出話を共有できる場をつくっていく」実践のために必要なことでもある。つまり、「呼び込み」という実践の提案と、「最後の一枚までも続けていく」という実践の提案は、二項対立形式で捉えられるものではない可能性も大にある。ただ、エスノグラフィにはこれ以上の記述はないため、読者に判断することはできない。また、著者自身はこのような事態に対して、写真班メンバーに声をかけるといったような具体的なアクションは起こしていない。

では、本著において固有名が記されている写真班メンバーはエスノグラフィでいかなる記述がなされているのか。同書の冒頭において写真班の「事実上のリーダー」(同書:3)として外館真知子氏、小野洋介氏の名前があがっており、二人が出会い、写真家の浅田政志氏が合流するなかで「写真班」の活動が生まれるに至った経緯が記されているが、厳密に言えばこれはエスノグラフィではない。そもそも、著者がボランティアとして参加をはじめたのは写真班の結成後3年以上経過していた頃であるため、当然ながらここに立ち会っていない。この経緯説明は、登場する3人や、このことに詳しい人物から話を聞き、整理したものであろう。この記述からは、彼らが「写真返却お茶会」において重要な人物であるということが示唆されるが、彼らの「写真返却お茶会」でのふるまいは、エスノグラフィにおいて一切記述されておらず、そもそも彼らがそこにいたかどうか記載がない。また、著者と彼らとの具体的なやりとりも一切記述されていない⁽²⁾。

上記の3人を除く、写真班を構成するメンバーの固有名は本文中にはな

く、「あとがき」に記されているのみである。「本書で何度も何度も登場したチーム北リアス写真班のみなさん（まちこさん、さおりさん、あらやんさん、三浦さん、家口さん、彩子さん、洋介さん、かよこさん、まつつんさん、こいけんさん）とは、一人のボランティア仲間として活動をともした」（同書：291）とあるが、ここで著者が「何度も何度も登場した」とするこの形容は、「チーム北リアス写真班」にかかるとはなっていないのだから。彼らのそれぞれの考え方やふるまいといったような「写真返却お茶会」をめぐる群像は、先に示したように、匿名化されているわずかな箇所を残し、消失している。

3. 「合宿」の記述における事実と異なると思われる記述

同書は、チーム北リアス写真班が行う「写真返却お茶会」だけではなく、著者が国内外⁽³⁾で見聞きしてきた事象が随所に挿入されている。ただし、その形式はインタビュー、コラム、エスノグラフィなど様々である。このような間奏曲的な経験の挿入によって、「記憶」や「復興」という概念の再考が目指されている。

その挿入文の一つである「コラム くろじいと約束、そして物語について」（同書：168-172）は、宮城県塩竈市寒風沢島でのエピソードが展開されているものであるが、そこには明らかに事実と異なる記述がある。このコラムでは、著者が「仙台で知り合った方から海の日の前日に塩釜市の沖合にある小さな島で合宿をしているから宮前くんもおいでよ」と誘われ、それに応じた著者が、寒風沢島の民宿の主人である「くろじい」と交流するに至る様子が記述されている。コラムは4つのブロックに分かれており、冒頭と末尾のブロックが寒風沢島での合宿のエピソードである。なお、途中挟まれているのは、南三陸でのエピソードと著者の子供時代のエピソードである。

ここで断っておくことがある。本稿を書いている私、高森順子はこの現場を著者とともに行っていた。ただし、ここでは、私自身の経験とそれに関する記録に依拠するのではなく、この現場にいなかった読者にも参照可能な情報から検討を進める。

まず、寒風沢島のエピソードで用いられる人物表現は、一人称は「僕ら」、「僕たち」、「僕」、「ぼく」、二人称および三人称は「おじいちゃん」、「仙台で知り合った方」、「くろじい」であり、実名は出てこない。ただ、このコラムは同著の第三章の注釈として紐付けられており、その第三章では、宮城県仙台市で震災アーカイブに関する活動を行っている佐藤正実氏、大林紅子氏、工藤寛之氏、天江真氏のインタビューが掲載されている。本文中には「私は、[佐藤] 正実さんと天江さんには、二〇一六年七月に宮城県寒風沢島で行われた『震災アーカイブとことん合宿』のときにすでにお会いしていた」(同書:107)とあり、同書を通読すれば、このコラムにおける「合宿」の名称やその参加者の実名の一部がわかるようになっている⁽⁴⁾。

コラムの冒頭では、仙台で知り合った方が著者を合宿へと誘うというアクションや、著者が参加した合宿で「くろじい」と呼ばれる民宿の主人と出会う様子が記述され、夜になって「くろじい」が「よし、そろそろ行くか」と言い、著者を含む合宿メンバーは「僕たちは、こんな小さい島どこにもいくところなんてないぞ、そもそも夜で真っ暗だし」と思いながら彼についていき、彼とともにモーターボートで沖に出る。「夜の海は、色彩がほとんどなく、ひたすらに無音」であったが、「八時。突然大きな音がして、反射的に見上げると、大玉の花火が打ちあがっていた」と記述されている。

この花火が上がったとされるのは、2016年7月17日の夜である。この日は、宮城県塩釜市「第69回塩竈みなと祭」の前日に行われる「前夜祭花火大会」が塩釜港周辺で行われている。塩釜港に浮かべた2隻の台船から約7,000発の花火が20:00から20:50のあいだに打ち上がり、約10万人の観客が、市営汽船や民間のクルーズ船、棧橋や特設のデッキなど、海上と陸上の双方から花火を観覧している(塩釜市市民総務部秘書広報課 2016)。この状況において、花火が上がることを事前に知らないということはまず考えられない。また、著者が花火を見る直前のシーンにおいて、自らの周囲の状況を「色彩がほとんどなく、ひたすらに無音」と記述しているが、花火観覧のために塩釜港を遊覧する多数の船の灯火や汽笛、著者が乗っていたモーターボートのエンジン音があり、周囲はきらびやかで騒がしかったと考えるのが妥当である。そうした点から、このコラムは、エスノグラフィではなく、著者の経験から着想を得たフィクションであるというべきだろう。この文章は「コラム」と名がつけられているため、それがフィクションであったと

しても厳密に言えば問題にはならない。ただ、同書がエスノグラフィを記述手法として採用したと記述していること(同書:91)や、同書にこのコラムに関わる人々がインタビュー対象者として現れ、彼らの言葉が直接話法で引用されていることを考えると、読者はこのコラムをフィクションとしてではなく、事実に基づくエピソードとして読む可能性が極めて高い。その意味で、このコラムをフィクションとして読むべきものとして挿入されているとして肯定することは困難であり、事実と異なる記述を含んでいる誤謬と見なさざるをえない⁽⁵⁾。

また、ここにおいても、複数の人々によって構成されていた合宿という現場が、ある時点を経に著者と民宿の主人である「くろじい」の一対一の関係に切り縮められ、現場にいたはずのその他の人々のふるまいは全く記述されなくなる。その時点とは、打ち上げ花火について「こうやって海から見ると綺麗だろ」と「くろじい」が「顔をこちらに向けるでもなく」言うシーンであり、そこから、主語は「僕ら」や「僕たち」から「僕」に変わる。そしてこれ以降、群像といえる合宿メンバーの現場でのふるまいの記述は消える。著者である「僕」は「来年もまた見に来ます」と言い、「くろじい」は「そうか、じゃあ来いよ」と答えている。そこで寒風沢島のエピソードは一度切れ、別のエピソード⁽⁶⁾が2つ挟まれてから、コラム終盤の二段落分で再登場する。そこでは、「くろじいと約束」したことを著者が思い出しながらコラム⁽⁷⁾を書いているシーンが展開される。合宿メンバーのふるまいへの言及はなく、主語も「僕」か「ぼく」のどちらかであり、やはり群像は記述されていない。

4. アクションリサーチにおいて「群像」が消失すること

人々が行き交う現場を考察する際に、そこで展開された人々の言葉のやりとりやふるまいを群像として捉えて記述することは欠かせない。もっといえば、それこそが現場を見るということである。同書においても、「フィールドノートには、写真返却お茶会の様子や、被災者同士の会話、ボランティア同士の会話、被災者とボランティアの会話、それぞれのしぐさなどを網羅的に記録した」(同書:92)とあり、群像への関心が少なくともエスノグラフ

ィとして「清書」(同書:93)する前にはあったのである。では、なぜそれが「清書」とともに消失したのか。

同著に通底する研究スタンスについて、著者は次のように記述している。「本著は、広義のアクションリサーチを行ってきた。そのためには、現場のベターメントをめざす実践を描写することが必要になる」(同書:90)。つまり、ここで著者は現場の群像をエスノグラフィに記述することだけでなく、「ベターメントをめざす実践」が展開されていなければならないと考えている。なるほどアクションリサーチとは、研究者が現場に介入し、当事者とともに現場の変革を目指す研究スタンスである。したがって、それが成立していると論じるためには、研究者が研究という「異物」を現場に持ち込むことによって、その現場が「より良く」なったこと——少なくとも、その途上にあること——を示さなければならない。しかし同時に、研究という「異物」は現場にとっては必ずしも良いものであるわけではなく、ゆえにその是非について研究者は不断に問わなければならない(e.g., 矢守 2010; 渥美 2014)。このようなアクションリサーチの特性を鑑みると、その群像の消失に至る条件の一つは、アクションリサーチが確かに成立していたということを著者が性急に論じようとするあまりに、かえってその前提であるはずの現場のダイナミクスの理解という研究関心を維持できなかったということにあると推察される。

アクションリサーチにおけるエスノグラフィは、当事者(実践者)の一人としても、研究者としても、その著者自身が現場に存在しているように読むことができる記述であることが望ましい。当事者の一人として自身を記述しようとする、自身を取り巻き、運動する人やモノなど、様々なアクターを書くことが必要になる。ただし、そこには因果関係や二項対立関係といった構造では説明が困難な事柄が含まれるのも常である。一方、研究者として自身の存在を描き込もうとするときには、「研究」という異物を持ち込んだことが現場にとって「良いこと」であったと証明するようなストーリーラインを構成する必要に迫られる。つまり、アクションリサーチのエスノグラフィとは、研究者を含む群像を、多面的かつ分裂的なアクターの集合として記述しつつ、「研究の導入」という原因によって「現場の変革」という結果が引き起こされるというストーリーも示さなければならない。因果関係や二項対立関係による記述はある意味でもっとも分かりやすい「証明」の方法だ

といえよう。つまり、同書において著者は、その課題に応えようと、「研究の導入」と「現場の変革」の因果関係の証明を過度に前景化していると考えられる。言い換えれば、現場の変革のファクターとして自らを位置づけようとするために、現場の動態を「一人の研究者兼実践者」と「一人の当事者(研究対象者)」という、一対一の因果論的、目的論的關係の形式に落とし込むことに囚われていたのではないか。現場の縮減ともいべきそうした変換の繰り返しのなかで、現場の展開動因としての著者自身の存在と実践を際立たせようとするあまり、事実と異なる記述さえ生じるに至ったのではないか。

さらに言えば、同書において群像を記述するということは、「写真返却お茶会」などの現場のダイナミクスの理解において必要であるだけでなく、著者が同書の目的の一つとしていた当事者の「記憶」への接近においても欠かせないはずである。「私」と「Aさん」といったような一対一の関係ではなく、「写真返却お茶会」という群像の一部であるところの「私」と「Aさん」が、周囲の人やモノから影響を受けながら「記憶」なるものを浮かび上がらせていくやりとりの過程を見なければならぬのではないか。著者が研究対象者である当事者の「記憶」の存在を知覚することができたのは、著者一人の存在と投げかけが原因ではないはずだ。著者以外のボランティアなど、そこに集う人々の存在とそのふるまい、被災写真群というモノの集合が少なくともあり、それらが幾重にも影響しあって生まれたのが、「記憶」の存在を知覚するようなやりとりではないだろうか。つまり、同書が目指していた「写真返却お茶会」の動態の理解と、その先にある「記憶」や「復興」の概念のアップデートにおいて、群像の記述は不可欠であったにもかかわらず、同書はその一点において、アクションリサーチとしての価値を自ら毀損していると言わざるをえない。

5. 「現場らしさ」をめぐる誤謬を回避し群像を記述するために

では、現場の群像をエスノグラフィに記述するにあたり、研究者は何に注意を向ければ良いのか。その手がかりとして、社会学者の森川至貴の議論を参考にする(森川 2017)。森川は、自身がゲイの当事者であり、かつ、ゲイ

コミュニティの研究を行ってきながらも、エスノグラフィを記述してこなかった。森川は、自身とゲイコミュニティの関係について「居場所がしんどい、だから現場がこわい」(森川 2017:242)と述べている。さらに、「調査者だけが現場＝居場所のありように『なじんで』いない、という特権視は避けなければならない。むしろ、現場の人々もまた現場に『なじんで』いない可能性が存在する」(森川 2017:242)と指摘する。しかし、しばしば研究者は現場への肉薄にあたり、現場の「現場らしさ」を探そうとして、当事者が現場になじんでいる状況を観察しようとし、研究者もまた現場になじもうとすることがあると論じている。そして、このような「観察する／される」をめぐる力学は、現場への「なじめなさ」、「居場所のなさ」、「乗り切れなさ」などを、「現場らしさ」ではないとして捨象しうると指摘する。

同書においても、被災地という現場を研究対象としていたことを考えると、そこに集う人々が多かれ少なかれ「なじめなさ」を感じていたことは想像に難く無い。著者は「写真返却お茶会」を、「一枚でも多く返す」という数値目標重視のアプローチではなく、「最後の一枚まで返す」という、現実的には達成する可能性が極めて低い目標を立脚点とした、人々との「自然な人間関係」(同書:267)を維持する萌芽となるアプローチであると捉えている。確かに、当事者を焦らせるような言説が被災地には飛び交っており、当事者が疲弊してしまうことは理解できる。ただ、実現可能性が低い目標を立てることで、「自然な人間関係」が生まれるというというのは、あまりに素朴な理解ではないか。叶わぬ目標があるということは、多くの被災者に当てはまるだろう。「被災前に戻りたい」と願っても、「亡くなった人に生き返ってほしい」と願っても、叶うことはない。それでも願わずにはいられない。そのようなジレンマを抱えた当事者は、つねに、自らの眼前の現実にたいして「なじめなさ」、「居場所のなさ」、「乗り切れなさ」を抱えているのではないか。その視点に立てば、「写真返却お茶会」という実践は、写真を返す者たちも、写真を探しにきた者たちも、そこに集う人々は多かれ少なかれ「叶わないけれど願わずにはいられない」というジレンマに引き裂かれていたのではないか。そして、そのジレンマは「写真返却お茶会」への「なじめなさ」や「居場所のなさ」としても現れてはいなかったか。それらのイメージは、「現場らしさ」からは逸脱している。しかし、だからといって研究者がエスノグラフィにその群像を記述できないというわけではない。森川は「現場の

ありようが『現場らしさ』という想定に逆立するものであれば、多かれ少なかれ調査をしているフィールドワーカー自身はその逆立に気づく」(森川2017:246)として、研究者があらかじめ想定している「現場らしさ」の先入観を、現場を見ることで更新し記述することができる」と述べる。この考えに従えば、現場の動態を記述するという事は、自らも群像の一部となりながら「現場らしさ」の仮設と解体を繰り返し、素朴な現場理解からの脱却を図ることであるといえる。

群像を記述することをめぐる困難は、同書に限った問題ではなく、人々の生活世界に介入する現場研究についてまわる問題である。しかし、その記述の方法論は、研究者としての経験値がものをいう職人的な芸芸としての側面に注意が向けられるあまりに言語化することが敬遠されたり、研究者それぞれの「言い回しの癖」に過ぎないとして、議論の遡上にあがってこなかったとはいえないだろうか。

最後に、同書が博士論文をもとにしているということを考えると、アカデミア全体の構造的問題も見えてくる。前述したように、アクションリサーチの成立には、現場で展開された協働的实践によって現場の変革が起きた、ないしはその道筋が見えたことを記述することが条件となる。当然、実験や質問紙調査とは異なり、研究者のアクションの時期を研究者自身で設定することは完全には不可能であり、アクションを現場に差し入れる機会を待つしかないときもある。その一方で、多くの大学院生が研究成果を短い期限内に出すことを求められ、発展途上の研究に無理やり「成果」を見出そうとすることは想像に難く無い。エスノグラフィにおいて、群像を消失させること、および事実と異なる記述をすることは、同書をめぐる特異な問題ではない。現場研究の担い手を育てるといふ営みを、大学教育あるいはアカデミア全体の構造的な問題から捉え直す必要に迫られているのではないか。

注

- (1) 本書における「写真返却お茶会」に関する11のエスノグラフィのタイトルは以下である。「まちのアルバム(二〇一四年六月二九日、午前、生涯学習センター)」(同書:6-9)、「写真返却お茶会に来ない理由(二〇一四年十二月十四日、午前、総合センター)」(同書:145-147)、「思い出すことのでなくなった記憶(二〇一四年十二月十四日、午後、野田中仮設集会場)」(同書:147-149)、「母

親の遺影の夢 (二〇一五年四月二十六日, 午前, 生涯学習センター) (同書:149-151)、「ケース1 言葉では説明困難なことを説明する場合 (二〇一五年八月二十六日, 午後, 野田中仮説談話室) (同書:226-227)、「ケース2 他人の赤ちゃんの写真 (二〇一五年二月一〇日, くじなのだ特設スタジオ) (同書:228-229)、「ケース3 『秘密』 (二〇一五年一月一五日, 午後, 泉沢仮説談話室) (同書:230-232)、「ケース4 再会 (二〇一七年六月一八日, 午前, 新町地区コミュニティセンター) (同書:232-233)、「『一枚でも多く』 (二〇一四年一月二四日月曜日, 陸前高田市にて) (同書:255-257)、「『最後の一枚まで』 (二〇一五年六月二一日, 野田村にて) (同書:258-258)、「俺が写真見つけるまで, 返却会続けてちょうだいね (二〇一五年二月一二日野田村および久慈市にて) (同書:259-261)。なお、「写真返却お茶会」のまとまった記述について「エスノグラフィ」または「フィールドノート」と表記しているが、本稿ではどちらもエスノグラフィとして取り扱う。

- (2) 著者と写真班メンバーの関係が窺い知れる部分はほとんどないが、本書冒頭において「当初は、ボランティアとしてはるばる大阪から毎月やってくる謎の大学院生だったが、半年が過ぎるころには『宮前くん』になっていった。この関係は、初めて会ってから七年以上が経とうとしている現在でも変わっていない」(同書:3)という記述がある。ただし、この記述でもって著者と写真班メンバーの関係の内実を推察することは困難である。
- (3) 本著で言及される著者の経験(協働的实践、参与観察、インタビュー調査など)は、著者の中心的なフィールドである九戸郡野田村以外に、国内は宮城県(仙台市、南三陸町、塩竈市)、岩手県陸前高田市、大阪府大阪市、国外はバンダ・アチュ(インドネシア)でのものがある。
- (4) コラムの冒頭で、この合宿が行われた時期を「去年」と記しているが、これは著者がこのコラムを書いた時期においてである。ただ、同書にはこのコラムの出典が記載されていないため、いつ書かれたものであるかを読者は判断できない(書かれた時期については注6を参照のこと)。以上のことから、これは誤植として扱うべき事柄であろう。
- (5) 本著に出典が記されていないが、このコラムは2018年3月の大阪大学発行の紀要「未来共生学」第5巻(431-435)に掲載されている。初出の紀要掲載前、および本著の出版前に著者から関係者へ事実確認や文面の確認依頼はなかったと複数の関係者が述べている。また、同書の第3章のインタビューを含む箇所についても、対象者となった4名に対して内容に関する事前確認はなされていないと複数の関係者が述べており、誤謬に気づく機会が失われていた。
- (6) 南三陸でのエピソードと著者の子供時代のエピソード。
- (7) 文中には「エッセイ」とあるが、表題が「コラム」と書いてあるため、この表記を優先した。

参考文献

渥美 公秀 2014『災害ボランティア——新しい社会へのグループ・ダイナミックス』

「群像」が消失したアクションリサーチ—宮前良平『復興のための記憶論—野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィ』を考える—：高森 順子

弘文堂。

木村 周平 2021 「〈かつてあったもの〉たちとの「これから」——多様なものたちが
共にあるものにならんことを」図書新聞, 3499号。

塩竈市市民総務部秘書広報課 2016 『広報しおがま』平成 28 年 7 月号。

宮前良平 2018 「くろじいと約束、そして物語について」未来共生学, 5 号。

森川 至貴 2017 「居場所がしんどい、現場がこわい」現代思想、45(20), pp. 238-248

西村 ユミ 2007 『交流する身体——「ケア」を捉えなおす』NHK 出版。

矢守 克也 2010 『アクションリサーチ——実践する人間科学』新曜社。